

「給食室のいちにち」を読んで

金田小学校 四年 末永 柚愛杏

わたしは「給食室のいちにち」という本を読みました。この本を選んだ理由は、わたしがいつも食べている給食のことが気になっていたので。

この本は、給食室で働く調理員さんたちがいろいろな工夫をして給食を作っていく様子のお話です。

本を読みながらワクワクしたことは、かくし味の調味料は何だろう？と知りたくてワクワクしました。

初めて知ったことは、しょう油には三〇〇しゅ類以上の香りがふくまれている、カレーをまろやかにしてくれることです。

すごいと思ったことは、もしわたしが給食室の人たちと同じような立場だったらと考えると、毎日生徒の人数分給食を作ることが大変だろうと思いました。なぜなら、ふつうの家族は4・5人くらいですが、生徒の人数はふつうの家族よりはるかにこえた、四五〇人分の給食を毎日作っているからです。

この本で心に残ったところは、それは新しい給食のこんだてを考えることです。季節に合わせて地元でとれた食材をとり入れたり、えいようたつぷりの給食のこんだての内容を

作ったりします。

わたしだったら、お弁当のような給食を作りたいです。たまごやきやウインナー、サンドイッチなど自分の好きなお弁当のおかずを考えることが楽しくておもしろかったです。他にも、おすしやピザのようなお店で食べるメニューなども思いかびました。

この本でふしぎだと思ったことは、役目ごとにエプロンや手ぶくろ、くつを決めているのはなぜだろうと気になりました。

わたしの考えは、エプロン、手ぶくろ、くつは一人に一つだと思えます。役目ごとに四パターンもありました。

初めに、下ごしらえをする下しよ理室でのエプロンは肉やたまごをあつかった手ぶくろで野菜をさわるとふえい生だから使いすての手ぶくろを使用します。次に調理室のエプロンは、火を使うので布の素材だともえやすいので、えいにくい素材にすることがいいと思います。手ぶくろも同じようににもえにくい素材だと安心すると思います。

調理が終わった後はいぜんの用意をする人のエプロンは、考えたけどあまりとくちょうが分かりませんでした。

最後に、洗い物やそうじをする時のエプロンは、水を使うのでぬれたりよごれたりして

も大丈夫なエプロンを使用することがいいと思います。

この本を読んで、これからわたしが料理をする時は、せいけつに保つように気をつけること。それから、えいようと季節の食材を使った料理をたくさん作ってみたいです。

「生きるお手つだいは、じゅん番だよ」

佐太小学校 三年 松本 陽紗乃

わたしは、よく「お手つだいをして。」と言われます。その時は、せんたくものをいれたり、りょうりを手つだったりしています。図書館で、本をさがしていたときに、「生きるお手つだい」という、言葉を見つけて、「どんなお手つだいなんだろう。」と、ふしぎに思ったので、この本をえらびました。

この本には、さい初になんでもできる、元気なおばあちゃんが出て来ます。わたしのおばあちゃんも、そうじや、せんたく、料理も自分で、出来るので、このおばあちゃんと同じだなあ、と思いました。

でも、本の中のおばあちゃんは、どんなできないことがふえていきました。一人でおふろに入ることや、トイレに行くことも、できなくなりました。そこで、「生きるお手つだい」が出てきます。「生きるお手つだい」とは、オムツをかえたり、お風呂に入れたり、ごはんを作ることでした。わたしには、とてもできそうにないおつだいばかりでした。

この本の中で一番心にのこった言葉は、「ぼくたちがおばあちゃんを助ける番なんだ」と、いう言葉です。おばあちゃんは、小さいころにたくさんすけてくれたから、こんど

は、助けてあげたいと思ったのだと思います。

わたしは、まだおばあちゃんを助けるよりもおばあちゃんに助けてもらうことの方が多いと思います。でもこの本のおばあちゃんと同じで、わたしのおばあちゃんも少しずつできないことがふえていくかもしれません。そのことを考えるときみしくなったり、かなしくなったりします。でもおばあちゃんの事が大好きなので、こまっているときは、助けてあげたいと思いました。たとえばおばあちゃんには、いつも足がいたいと言っているので、おもたいにもつをもったり、おばあちゃんは犬をかつているので、犬をさんぼにつれていてあげたりしたいです。

そして本の中では、「それから数十年がたちました。」そしてやさしい男の子も何もできないおじいちゃんになってしまいました。でも、そのおじいちゃんには、家族がいたので、「生きるお手つだい」をしてもらいたずかりました。その時にも、「じゅん番だよ。」と言っていました。いつかわたしもおばあちゃんになったら、生きるお手つだいをしてもらえるような家族になりたいなと思いました。わたしの学校の前には、ろう人ホームがあります。そこでは、家族じゃないのに生きるお手つだいをしている人がたくさんいて、す

ごいなと思いました。わたしもお年よりの人だけでなくこまっている人がいたら、生きるお手つだいをできる人になりたいなと思いました。そして世界中の人が生きるお手つだいをできたらいなと思いました。